

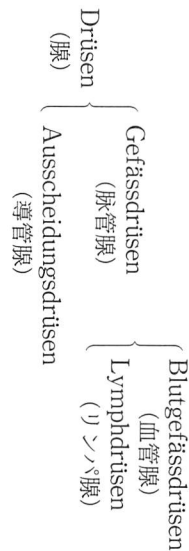
6 内分泌の概念のおこり

藤田尚男

フランスの有名な生理学者、クロード・ベルナールは、肝臓から血中に糖が出る現象を「*secretion interne* (内分泌)」と名づけた。一八五五年であった。糖はホルモンではない。したがってホルモンを分泌する現象を内分泌とよぶ現在の定義とは少しずれているが、大抵の成書ではこれが「血管への分泌」、すなわち「内分泌」の概念のはじまりということになっている。

私は昭和五十四年にヴェルツブルク大学の解剖学教室やウィーン大学の図書館で昔の書物を繰っていたさいに、クロード・ベルナルよりも二十五年も前に、ドイツのウェーバー (Ernst Heinrich Weber) が監修した『Friedrich Hildebrandts Handbuch der Anatomie des Menschen 第一卷 (一八三〇)』の『Gewebe der Drüse (腺

組織)』の項に腺が次のように分類されていることを知った。



このうち「導管腺」は今でいう「外分泌腺」に相当する。ちなみに脾臓、顎下腺、耳下腺などの導管はすでに十七世紀に記載されている。これに対して「血管腺」は血管にむかって何かを分泌する腺であり、「内分泌腺」に相当する。なおウェーバーは、血管腺として甲状腺、胸腺、脾臓、副腎をあげている。

無から有は生じない。このように「血管腺」という概念が生まれたのには、歴史的な伏線がある。十八世紀の後半にスイスのフォン・ハラー (Albrecht von Haller) は、甲状腺、胸腺、脾臓を「導管のない腺」としてまとめ、これから出される特殊な液が循環系に注がれると考えている。また組織学の祖とされているフランスのビシャール (Marie F. X. Bichat) は一八〇一年に出した名著

『Anatomie Générale, Appliquée à la Physiologie et à la Médecine』の中で、生体の組織を二十一個に分類しているが、その中に「腺」の項があり、副腎、甲状腺、松果体、リンパ節、胸腺を導管のない尿管につながる異質の腺であると述べている。このことは十九世紀のはじめに「導管のない腺」の存在が、かなり強く認識されるようになっていたことを物語る。

このことは一八五五年にクロード・ベルナルが「内分泌」という名称を作り、一九〇五年にスターリング(Ernest H. Starling)がホルモンという概念を生み出すよりもはるか昔の形態学者の中に、「血管に分泌する腺」の存在を意識する人がいたことを意味する。

一八四一年にドイツのヘンレ (Jacob Henle) が出した『Allgemeine Anatomie』の中には、「von den Drüsen (腺にうづく)」の見出しのもとに、「Haut- und Schleimhautdrüsen (皮膚腺と粘膜腺)」「Blutgefäss drüsen (血管腺)」とが、約二十頁を費して詳述されている。前者が外分泌腺、後者が内分泌腺に相当するものであり、「外分泌に対する内分泌」という考えがドイツの権威ある解剖

学書の中に定着していることを示している。ちなみにヘンレは、腎の「ヘンレのわな」や、網膜の「ヘンレの線維層」にその名の残る十九世紀のドイツが誇る大解剖学者である。

学問の業績は、偶然を含む多くのファクターや条件によって後世に残ったり、誤まり伝えられたり、消えたりするのである。

(大阪大学名誉教授・塩野義製薬研究所)